論文 日本人の自然観：自然を客体視できない心性について
―― 文学史的観点を中心に ――

榎本博明
名城大学教職課程部

Japanese View of Nature
— On the Mentality Incapable of Taking an Objective View of Nature : Mainly from a Viewpoint of Literary History —

Hiroaki ENOMOTO
Department of Teacher Education, Meijo University

(受付日 1994年4月25日・受理日 1995年1月18日)

Environmental problems are regarded essentially a thought problem. The purpose of this paper is to clarify the characteristics of Japanese view of nature that is inevitable theme when considering effective environmental education.

In the first place, the meaning of the concept of "nature (SIZEN in Japanese)" was examined from the historical perspective. Secondly, Japanese mentality to notice great power overwhelming human intellect in narure and to be in close contact with nature on the other hand was disscussed. Finally, Japanese mentality incapable of taking an objective view of nature was illustrated from a view point of literary history.

Viewed in this light, it was pointed out that "of-itself-worship" resulted from the primitive mentality not to separate oneself from nature and to trust in the natural power could be regarded as the crucial disposition characterizing Japanese traditional view of nature.

Key words : environmental education, Japanese mentality, Japanese view of nature, objective view of nature, of-itself-worship

環境問題に関する研究は，自然科学や社会科学の領域でさかんに進められているが，人文科学領域の研究がまだ少ないように思われる。だが，技術的な問題も法律的な問題も，その背景となる哲学的な問題や心理学的な問題を抜きにしては根本的な解決は期待できないであろう。谷口は環境倫理の基礎固めとして環境思想の検討を行っているが[1]，環境問題には思想的な問題とみられる面が非常に強いのである。環境教育の領域においても，欧米の環境保護思想やその実際的な方法が導入されつつあるが，単にそれらに追随するだけでは根本的な意識や行動の変革をもたらすことは難しいと考えられる。それらをしっかり消化し，有効に生かしていくためには，われわれの意識や行動に知らずしらずのうちに影響を及ぼしているわれわれ自身の自然観・環境観，その背後にある日

(問い合わせ先) 〒456 名古屋市熱田区桜田町 15-2-301

本人の伝統的な自然観・環境観の特徴をしっかり把握しておく必要がある。

日本人は，古来自然を愛し自然とともに生きてきたといわれる。実際，日本人は自然に対する豊かな感受性をもち，日本文学の代表である和歌においては，自然の景物や季節の移りゆきに託して詠み手の心がうたわれてきたという伝統がある。中国の詩では政治詩・社会詩が中心であり，その文化的影響は非常に大きいはずであるのに，日本の和歌においては万葉集以来自然と恋愛の２つが中心的なテーマであり続けた。和歌と並ぶ日本固有の文学形式である俳句においても，季語が不可欠の要素であり，自然が中心的な位置を占めている。欧米の聖書に対して日本では歳時記が多くの家庭に備えられているといわれるが，日本人にとって身の回りの自然に四季の移り変わりを感じつつ生きるという姿勢がごく自然なあり方となっている。

本論文は，このように自然に密着した生き方をする日本人がどのような自然観を形成してきたのかを浮かび上がらせることを目的としている。その際，論理的把握よりも感覚的・直感的把握を得意とし，抽象的思考による哲学的体系化をめざすよりも，具体的な事物に即した情緒的表出に漂うことを好む日本的伝統に鑑み，とくに文学史的な観点を中心に日本人と自然との関わり合いを検討していきたい。この一考察が，自然を愛し，自然と密着して生きてきたと考えられる日本人が，同時に自然保護意識が希薄であると批判され，日本には自然保護運動が根づかないなどと言われる一見矛盾する事態への理解の助けとなり，わが国にふさわしい環境教育のあり方を探るための手がかりを与えることになればと考える。

１．自然という概念の意味するところ

日本人の自然観をめぐる考察の導入として，まずはじめに自然という概念について検討しておきたい。

われわれは日頃「自然」という語をとくに意識せずに用いているが，これには大きく分けて２つの用法がある。ひとつは，自然という語で天地間の万物，すなわち山，川，草，木，動物，風，雨など，人為によらずおのずからなる生成・展開のもとに存在する事物を指すものである。この場合の自然は，自然科学の対象としての意味ももつことになる。他のひとつは，自然という語でおのずからそうなっており人為が加えられていないあり方，ありのままでわざとらしくないあり方を意味するものである。この場合は，事物そのものでなく状態を指すことになる。

現在では当然のこととして受け入れられている第一の用法は，日本語の長い歴史の中で見ると，ごく最近定着したものなのである。古語辞典類によれば，自然の語は，名詞的にはおのずからであること，本性を意味し，副詞的にはおのずから，ひとりでにのような意味で用いられる場合と万一ひょっとしてのような意味で用いられる場合とがあった。いずれにしても，前述の第二の用法に限られ第一の用法は見あたらない。

そもそも自然の語は中国から入ってきたものである。中国で自然の語がはじめて用いられたのは老子においてであり，ひとりでに，おのずからそうである状態，本性などを意味する用例がみられる。そこでは，「道は自然に法（のっと）る」「道は常に為す無くして，而も為さざるは無し」(2) のように，人為を排した無為が説かれる。荘子においても，良き時代においては物のけじめも何もないままにすべての人々がうまく調和し安らかに暮らし，人間の知恵を働かす必要がないので，人々は意識的に物事をしようとはせずに常に自然なりゆきに従っていたとし，物事のなりゆきに任せてあれこれ考えることなく必然の運命に従うのが最善であるとして，「無為に若（し）くは莫（な）し」(3) のように人為を排した無為が説かれている。この老荘思想における自然が輸入されたのである。

現在では当然のように採られている第一の用法は，英語のnature，オランダ語のnatuurの訳語として自然の語が与えられることにより初めて生じた用法なのである。これらの訳語として自然の語が定着したのは，明治30年代のことであるとも明治の終わりから大正にかけてであったともいわれ

るが，いずれにしてもまだ百年足らずの歴史しかないわけである。

英語のnatureやオランダ語のnatuurの訳語として自然の語があてられるようになったのは，もちろんもっと以前のことである。その起源とされるのは，1796年に出版された稲村三伯による最初の蘭日辞典「波留麻和解」で，そこではじめてナトゥールに自然という訳語が与えられたとされる[1]。しかし，これがすぐに定着するということにはならなかった。明治時代の初期から中期にかけて活躍した啓蒙思想家である西周の著作を例にとっても，ネイチャーやナトゥールの訳語として，1877年の「学芸志林」では天然，84年の「哲学字彙」では天理や造化，88年の「物理学術語対訳字書」では天然，1904年の雑誌「サイエンス」では万有をそれぞれ当てており，自然の語を当てるには至っていない[5]。

すなわち，natureやnatuurの訳語として天地や万有に代わって自然の語が定着するのに100年もかかっているのである。このことは，それまでおのずからという意味において用いられてきた自然の語をnatureの訳語とすることの無理が少なからずあったことの証拠ともいえよう。

英語のnatureやオランダ語のnatuurの語源はラテン語のnaturaであり，これはさらに遡るとギリシャ語のphysisの訳語であった。このフュシスは，制度・慣習・法律など人為的につくられたものをさすノモスに対して，生成，人為を介さずおのずと生成し発展するもの，内在的に運動の原理をもつもの，あるいは本来的なあり方，本性などをさす言葉であった。これが生み出されたものを意味するナトゥラと訳されることで，古代ギリシア的なおのずからなるあり方あるいはおのずからあることといった意味あいが薄れ，客体物としての自然界の事物を意味するようになった。とくに，ベーコンあたりから，ナトゥラは人間に支配されるべき対象としての自然物といった意味あいが生じてくることとなった。

おのずからを意味する点において，ネイチャーあるいはナトゥールと日本語の自然との間には共通点があった。しかし，前者がおのずから生じたものとしての客体的事物を意味するのに対して，後者は無為自然のような用法からも察せられるように人為の加わらないおのずからある状態，親鸞が自然法爾というときの人間の側の計らいのないあるがままの状態，主客未分化の状態を意味した。すなわち，自然はおのずから，ありのままといった人為の加わらない状態を意味するものであって，人間に対する客体としての山川草木などの天然物をさすものではなかった。キリスト教によって神による被造物とされ，さらに同じく被造物であるところの人間に利用されるために存在する単なる物として位置づけられるに至った，中世以後の西欧におけるネイチャーあるいはナトゥールと日本語の自然との間には，大きな溝があったといえる。

それにもかかわらずネイチャーあるいはナトゥールの訳語として自然の語が当てられたのには，それなりの必然性がなければならない。すなわち，西欧的な目でみれば客体的対象であるところの山川草木など天地間の万物を見るにも，日本人の場合は自分と切り離された単なる対象として見るのではなくおのずからを感じつつ見る，さらにいえば自らのおのずからなるあり方と重ねつつ見るといった姿勢があったからこそ，自然の語が選ばれたのではないだろうか。接ぎ木のようなぎこちなさがありながら，そこには古来の日本人の「自然」観の一貫した流れがみられるのではないか。

そこで，以下において，現在の用法における「自然」に対する日本人の態度をその自然崇拝および文学を題材に簡単に跡づけてみることにしたい。(以下においては，現在の用法，すなわち前述の第一の用法と第二の用法の区別をせずに事物と状態をともに意味する用法において，自然の語を随所で用いることになる。)

2．自然に神を感じる

イザナギとイザナミの男女2神の成婚によって国土が生まれたとする国生み神話をもつ日本においては，古来自然尊重の気風が強かった。日本書紀にも，「草木咸能く言語ふことあり」とあるように，山川草木のうちにも呪的な力の存在を感じとる。と同時に，それら自然物も人間もともに祖

先を同じくして生まれたと考えられたのであるから，人間にとって自然はとても身近で親密な存在であった。

小泉八雲は，「極東第一日」においてはじめて日本にやってきたときの第一印象を記しているが，そのなかで樹木の美しさに対する感動を，

> この神ながらの国では，樹木は遠い世のむかしから，この国土によく培われ，人にいたわり愛されてきたので，ついには樹木にも魂がはいって，ちょうど，愛された女が，男のためには紅鉄漿(べにかね)つけて容を美しくよそおうように，樹木もまた心を入れて，礼ごころをあらわすものなのだろうか[6]

のように表現し，さらに虫や花，山や川と人間との間にも格別の親和性がみられることを指摘している[7]。

自然が人間にとって親密な存在であった背景として，日本の温和な自然的条件をあげることができる。日本列島は，南は亜熱帯，北は亜寒帯まで延びているが，古代においては人々は大和地方を中心とする西日本に住んでおり，適度に温暖な気候に包まれていた。砂漠や大草原に囲まれた国々と違って，緑濃い山国であり，また四方を海に囲まれた島国でもあったため，天然の資源には非常に恵まれていた。山々から流れ出る小さな河川がいたるところを走っており，農耕にも支障はなかった。すなわち，人間にとって自然は母性的に包みこんでくれる優しい存在であった。

このような日本の自然の優しさは，温帯に位置するとはいえ，非常に例外的なもののようである。そのことは，はじめて異国の地を踏んで，その荒涼とした自然のすさまじさを目のあたりにした者たちの記録からも窺うことができる。たとえば，804年に長安に渡った空海弘法大師の「精霊集」や838年に入唐した天台僧の慈覚大師円仁の「入唐求法巡礼行記」には，美しくかつ穏やかな日本の自然に慣れ親しんできた古代の日本人が，すさまじい中国大陸の自然に接していかに驚かされ，また悩まされたかが記されている。弘法大師の入唐経験に綿密な検討を加えた桑原は，長安に至るまでの水路について，

> 支那では日本の様な清冽な水に乏しい。運河の河筋では皆河水を使用するが，それが頗る不潔である。・・・・・大師も潔癖なる日本人として，この道程の旅行には，飲料水に就いて，可なり困難を感ぜられたことと恐察いたすのである[8]

とし，それに続く陸路についても，

> 支那に於ける陸路の交通は，水路に比して概して不愉快と申さねばならぬ。第一に道路が非常に悪い。・・・・・雨が降ると，二尺も三尺もある深き泥濘となって，事実車輪の半ばを没する程である。・・・・・地質上已を得ざる点もある。かかる有様であるから，雨天の日には支那人は概して旅行を中止して，客舎で一日を空費する。されど我が大使大師の一行は，急ぎの旅とて，・・・・・雨を衝き風を冒して一向に前進を継続せられ，従って少からざる辛苦を嘗められた筈である[9]

とする。このような異国の自然のすさまじさを経験して日本に帰った当時の知識人たちにより，日本の自然の美しさ，愛らしさへの認識が深められ，それが歌われるようになった面も無視できない[10]。このような温和な自然であったからこそ，後にみるように，自然の懐に抱かれたいという日本人独特の自然に対する甘えの態度が培われたのであろう。

そんな美しく優しい日本の自然も，ときに恐ろしい厳しさをみせることがある。現代のように科学技術による自然のコントロールが進んでいる時代とは異なり，古代においては自然の猛威に翻弄されることも稀ではなかったに違いない。現代のわれわれであっても，地震や台風といった自然現象の怖ろしさは知っているし，鬱蒼と茂る森林や荒れ狂う海を前にして恐怖を覚えない者はないのではなかろうか。ましてや古代人の自然の威力に対する畏怖の念は相当のものであったと考えられる。自然の力は，農耕をはじめ漁労・採集に依存する古代人にとって，その生存をも左右するものであった。台風や大雨による洪水や日照り続きによる渇水には大いに悩まされたであろうし，四季が明確に存在する日本においては，田植えから刈

り入れに至る農耕の各行程も自然の推移に従って進めていかなければならなかった。そうした意味において，自然への依存度，自然との密着度は必然的に大きかったといわざるをえない。こうして，自然は恵みをもたらしてくれる感謝の対象であるとともに，災いをもたらす脅威の対象でもあった。

自然の力は人為をはるかに超えており，人間の生殺与奪の権力を握っているかのようであった。人間を優しく甘えさせてくれるかと思えば，ときに荒れ狂って人間を恐れおののかす自然。しかも，人間のはかない生命に対して，自然は人間の生滅に関係なく悠久不変に存在し続ける。そんな自然に人為を超えた根源的な力を感じるのもごく自然な心理であろう。山川草木のうちにもカミの力を感じとる自然崇拝も，そのような心理を背景にしてみれば，生じるべくして生じたものということができる。古代人にとっては，まさに自然は人為を超えた力，呪力に満ちた神秘的な存在なのであった。そのような自然とうまく手を結び，恵みを獲得しつつ脅威を減ずる方法として，自然を祀ることが始まったといえよう。すなわち，人為を超えた力を感じさせる根源的な存在である自然をカミとして祀るのである。

中世以来さまざまな学者が日本人古来のカミの観念について解釈を加えているが，もっとも説得力のある解釈を展開したとされるのが本居宣長である。宣長は，あらゆる自然の事物にカミを認める日本人のカミ観念を，「尋常(よのつね)ならずすぐれたる徳(こと)のありて可畏(かしこ)き物」という概念によってすくいとろうとした。宣長によれば，

> さて凡そ迦微(かみ)とは，古御典等に見えたる天地の諸の神たちを始めて，其を祀れる社に坐御霊をも申し，又人はさらにも云ず，鳥獣木草のたぐひ海山など，其余何にまれ，尋常ならずすぐれたる徳のありて，可畏き物を迦微とは云なり(11)

とし，さらに，

> すぐれたるとは，尊きこと善きこと，功しきことなどの，優れたるのみを云に非ず，悪きもの奇しきものなども，よにすぐれて可畏きをば，神と云なり(12)

のように解説している。この宣長のカミの解釈は，山川海のような悠久を感じさせるものから，草木鳥獣のように生滅の激しいものまで，それが人為を超えた不思議な力の存在を感じさせるものである限り，ありとあらゆるものにカミを感じる古来の日本人の心性をよく表すものといえよう。

宣長における自然について考察している山下によれば，デカルト的な神は己に一切の権限を集中するのに対して，宣長の神にはさらに自然という背後があるのであり，神は絶対者どころか人間に自然の相をより深く凝視させる役割を果たす。すなわち，根源は自然であって，神はその通路であるという(13)。すべての存在と通底している根源的なものが自然であるというとらえ方は，日本人にとって非常に馴染みやすいものであろう。

ところで，「可畏し」はいわばおそれおおいといった意味であるが，それは貴いという肯定的な意味だけでなく，恐ろしいという否定的な意味をも包摂する語である。このことは，自然が，恵みをもたらすことによる感謝の念と思いがけない災いをもたらすことによる恐怖の念といった両義的な感情の対象であることをよく表しているといえる。

3．文学における自然描写にみる自然観

人為を超えた不思議な力を感じさせることで古代人の心を強烈にとらえて放さなかった自然は，当然のことながら古来歌謡を中心とする文学の題材となることが多かった。

身近な自然物や自然現象を借りて思いを詠ずるのが古代人の得意とする作歌技巧であったが，自らの情意生活の表現材料として自然物を自由に駆使できたということは，彼らがいかに自然と親密であったかを示すものである(14)。ただし，古代人の文学においては，自然が純粋な客体としては描かれていない。これは未開の民族や乳児期に特徴的な主客未分化な原始心性の特徴とされ，やがて集団の文化的レベルでは文明化につれて，個人的レベルでは心理的発達につれて，そこから脱していくべきものとみられている。だが，以下にみるように，こうした心性を現代に至るまで保ち続

けたのが日本人の特徴でもあった。

記紀の歌謡においては，たとえその中に自然が詠まれていても，それは自然そのものを詠んでいるのではなく，人事を効果的に描出するための道具立てとなっている感が強い。ところが，古事記に伊須気余理比売の歌として，つぎの二種が掲げられている。

狭井河よ雲立ちわたり畝傍山木の葉さやぎぬ風吹かむとす

畝傍山昼は雲と　夕されば風吹かむとぞ木の葉さやげる

上代の歌謡は自然を描写するにしても人事を絡めて詠むのが常であった。このように自然のみを描写する，すなわち人事を離れて清澄な自然観照の態度を示す叙景歌は，古事記のなかではとくに例外的なものであり，自然を客観視する目をもち始めた兆しとして　万葉への橋渡しとなるべき性質を備えているとされる[15, 16]。ただし，この2首は後の時代に挿入されたものではないかとする説もあり[17, 18]、折口は仁徳天皇の

山科地(やまがた)に蒔ける菘菜(あおな)も吉備びとと共にしつめば愉しくもあるか

が叙情詩ではあるが自然に興味をもった最初期のものとみてよいのではないかとしている[19]。いずれにしても，古事記の時代には自然と向き合って詠まれた歌はほとんどなかったのである。

万葉集では，恋の歌と並んで自然を詠む歌が主流となっていった。また，万葉集の一部の巻（巻8と巻10）において，はじめて季節による歌の部立が採られた。これは，四季の観念が確立された証拠といえる。このように呪術的な自然観から脱して自然の流転の相に目を向ける自然認識の態度を獲得していく背景には，中国から流入してきた仏教の影響が大きいともいわれる。つまり，仏教的無常観が自然からその呪力をしだいに奪っていったというのである[20]。だが，万葉集に多くみられる叙景の歌は，はたして自然の呪力を排除して自然を客観視したものといえるのであろうか。

万葉集巻11および巻12には多くの寄物陳思歌が収載されている。これは何らかの自然物や自然現象を詠みつつ，それに寄せて詠み手の気持ちを表出するものであるが，万葉集に自然が豊かであるといわれるのには，この寄物陳思歌の担っている部分も大きいとの指摘もある[21]。また，初期万葉の額田王の歌などをみると，季節の推移の中にある景物自体への賞美が主題化されている。しかし，そこに歌われている自然は，山野にある自然そのものではなく，作者によって選ばれ，その美意識によって観念的に組み立てられ虚構化された構図としての自然であった[22]。

さらに，自然描写は呪的な讃歌から美的な季節歌へと移行し，自然現象の背後にあった神の力は季節の推移やその取り合わせの意識に置き換えられていったが，そもそも季節感は農耕の歳事と深い関わりがあり，一年の季節の滞りのない順行を祈願する観念とも重なる。そのような意味でいえば，季節歌は呪的な要素も担っているということになる[23]。自然と密着して生きていた古代人にとって，歌は神々の意志のあらわれである自然との交流を果たす呪術＝技術であり，自然を人のことばに翻訳したものであったともいえる[24]。

こうしてみると，万葉集に自然を詠んだ歌が多いといっても，それはけっして目の前の自然を客観的に見つめていたことにはならない。叙景歌でも，純粋に自然そのものをうたっているわけではなく，自然の移り変わりのなかに自分自身の心の動きを感じる，そうした気持ちを自然の描写のなかに託していることになる。そうであれば，ここには自然を自分とは切り離された対象として客観視する態度があるとはいえない。うたう人間とうたわれる自然との間には相関関係がある。もともと人間の心は自然の中に溶け込んでおり，その流れの中からその都度自分を汲み取ってくるといった感じであろうか。このように人間と融合した自然，人間の母胎のような自然を客観的にとらえることは不可能といえよう。

万葉歌人のなかで，大伴家持は，自然に対する態度が繊細で，その歌は自然との交渉によって成り立つものが多いとされる。家持は，季節に対する感覚がとくに鋭敏で，山川草木，雪月花などの自然の移ろいによく感応した。万葉には自然が豊富だといわれるように，家持の歌にも非常に多く

の自然の景物が詠まれている。家持によって詠まれた景物は，橘，梅，なでしこ，菖蒲，萩，卯の花など植物が89種，郭公，鶯，馬，鷹，さを鹿など動物が45種，雪，秋風，月，雨，霞など自然現象が50種にものぼる[25]。しかし，いわゆる花鳥風月に関する固定的な美意識も特徴的である。家持にみられる固定的な花鳥風月の取り合わせでとくに目立つのは，橘にほととぎす，あやめにほととぎす，卯の花にほととぎす，秋萩に鹿，秋萩に露などである[26]。四季の部立が確立した古今集以後花鳥風月的美意識が固定化されていくといわれるが，その兆候はすでに万葉の家持の歌風にみられるのである。

時とともに移りゆくものとして自然をとらえ，その変化を観察する態度は，平安時代になって確立したとされる。万葉集の一部にみられた季節による部立も古今集に至って確立し，歌は時間的順序にしたがってきちんと並べられるようになり，この様式は現在に至るまで受け継がれることとなった。

実際に自然に触れながらその実感を詠じた万葉の時代には，取材された自然の景物は自然現象も動植物も多種多様であったが，実地に自然に接することが少なくなり屏風絵を見て想を練り，あるいは一室にこもって苦吟するといった態度の生じた平安時代，たとえば古今集などでは，素材とされる自然物の種類は著しく減少し，かつ固定化している[27]。

古今集の代表的歌人である紀貫之は，「土佐日記」においてただひたすら都を恋うるばかりで道中の自然に少しも関心を示していない。春・秋の歌でうたった花はわずか6種類，小鳥は2種類にすぎない。うぐいすならうぐいすをうたうにも，現に目の前にいる生物としてのうぐいすではなく，うぐいすという言葉を好んでいたのであった。こうして平安時代の歌人は，行ったこともない歌枕の自然をうたうようになるのである。[28]

このように古今集においては，万葉集にみられたような雄壮な自然は姿を消し，優美で繊細な親しみやすい自然が好んでうたわれるようになった。そこでは，自然観の狭小化，定型化が進展し，詠み手の関心は身近な文化化された自然に限定されていったのであった。

また，古今集においては，

年の内に春は来にけりひととせを去年とや言はむ今年とや言はむ

といった自然の景物が全く読み込まれておらず自然の移ろいを喜ぶ詠み手の心情のみが詠まれている歌にみられるように，対象としての自然というより共感し交感する自然が中心となる。すなわち，古今集では，対象そのものを詠むのでなく対象に寄せる自らの切々たる心を詠むといった側面が強く，そうした意味において，純粋な自然詠は存在しないともいわれるのである。[29]

新古今集においてもこうした傾向はいっそう強まり，藤原定家のことばとされる

恋の歌を詠むには凡骨の身を捨てて，業平のふるまひけむ事を思ひいでて，我身をみな業平になしてよむ。地形を詠むにはかかる柴垣のもとをはなれて，玉の砌，山河の景気などを観じてよき歌は出来るものなり

に明らかなように，観念として把握された本意を伝統的古歌・物語・漢詩などによる詩的言語を通じて具象化することで，仮構の美的世界を構築していく。つまり，新古今集における自然把握は，現実に作者が凝視し感動している対象を写す写実的な自然把握ではなく，古歌伝統に基づいた情調的な自然把握であった[30]。その場合，たとえ自然の風物を詠んでいても，詠み手は目の前の自然そのものを見ているのではなく，それにまつわる物語，そしてその物語から喚起される情を感じていたのである。

また，新古今集には，

雨そそぐ花橘に風すぎて山ほととぎす雲に鳴くなり

のような客観的叙景歌の一群がある[31]。これは，詠み手の主観としての情を素直に表出する傾向のある古今集に対して，主観をつとめて隠して客観的な描写に徹することで余情を楽しむものである。だが，このような表面上は客観に徹したごとくにみえる自然描写も，言外にこめられた思いこそが意味をもつわけであるから，自然を自分とは切り

離された客体とみなしているとはいえない。自分の思いを代弁してくれる自然は，むしろ自分と一体化した存在であったといえよう。

さらに，新古今的な特徴としてあげられるのが眺めの意識である。式子内親王は，

更くるまでながむればこそ悲しけれ思ひも入れじ秋の世の月

のように，眺めという用語を多用している。この場合の眺めは，対象との間に一定の距離をおくことが前提となるが，単純な観察とは異なる。これは眺めつつ思うのであり，もの思いに沈みながらしみじみと眺める，対象をみつめながらものを考える態度である。(32, 33) 自然をみつめうたうといっても，そこには自然観照というような自然を対象として突き放して客観視する姿勢はなく，あくまでも自然を自らに重ねつつ眺めているのである。したがって，人間と自然はけっして切り離されておらず溶け合っていた。

こうしてみると，心理的に自然は自分と分かちがたい密着した存在であり，主体と客体の未分化を特徴とする原始心性は，洗練された平安貴族の内にもしっかり息づいていたといえる。

しかし一方では，現実の自然とじかに接することの少ないのが平安時代の貴族生活のひとつの特徴でもあった。洛外に出ることの少なくなった平安時代の貴族歌人たちの関心はいよいよ身近なものに限定されていき，現実の多様な自然との接触の少なさが花鳥風月的な自然観，すなわち定式化された自然に対する美意識の定着をもたらしたといえる。それと同時に，自然との接触の乏しさは，他方でしだいに引き離されていく自然に対する憧憬のようなものを強く意識させることになるのも必然であった。

平安貴族の生活にはさまざまな陰翳があり，現実生活の憂心からの救いを自然に求めるといった傾向が生じてくる。頽廃していく人間社会に煩わされることのない自然の清浄さへのあこがれ。自然美の魅力が人生の痛苦を消除してくれる無上の救済者として意識されるに至って，憂き世を逃れるべき場所としての山里への志向が誕生した。(34)

平安時代から鎌倉時代にかけて，人里離れた山の中に庵を結んだり，自然の中を漂泊することで俗界から逃れる隠遁的な生活へのあこがれが強まった。西行，鴨長明，そしてやや時代は下るが吉田兼好などにその典型がみられる。山里志向は，俗世間の煩わしさからの救済であるとともに，疎遠になっていた現実の自然にじかに接することで定式化し観念化していた自然観を打ち砕き，美的鑑賞の単なる対象と化しつつあった自然に生命を吹き込むという意味も担っていた。この大いなる自然の懐に抱かれることで世俗の煩わしさを忘れ，心の平安を得たいという心理の背後にあるのは，人為を捨てて自然に身を任せていれば理想的な境地に達することができるといった自然に対して頼り切った態度である。これは，切り離されつつある自然との一体感をなんとか回復しようとする試みであり，自他未分化な，すべてが調和し満ち足りていた原初の状態を取り戻そうという胎内回帰願望の現れであるとも考えられよう。

このように，自然は，中世においても人間にとって客体視されるべきものではなく，人為を超えた神秘的な力の満ちたもの，その中に溶け込むべき世界といった古来の地位を保つこととなった。

近世においては，都市の形成が人間をますます自然から遠ざけた。かつての貴族の花鳥風月的な自然に対する美意識は，庶民の世界にも浸透していった。しかし，もともと花鳥風月の世界の背後にあった仏教的無常観は色褪せ，自然の宗教化の基盤が弱まったため，花鳥風月の世界のよりいっそうの定型化とパロディー化が生じた(35)。季節感による束縛を捨て去って人間中心に移っていく人々の視覚は，庶民層においては川柳の流行をもたらした(36)。川柳はもともと人間性の赤裸々な描写を主な目的とするため自然より人間を描いたが，自然がテーマとして選ばれる場合は，それがよく擬人化され戯画化された。自然が川柳や狂歌の題材となり戯画化されること自体，自然を神聖視する見方が薄れてきたことのあらわれといえる。散文においても，たとえば十返舎一九の「東海道中膝栗毛」が道中で見聞した人情や習俗のユーモラスな描写を中心としており，自然の描写には何

の顧慮も示していない。こうした傾向が暗示しているように，都市生活のなかで人々の関心は，自然をめぐる風土的なものよりも人事をめぐる風俗的現象に引きつけられていったのであった。(37)

しかし，このような時代においても，旅をすみかとする芭蕉や山里にこもった良寛のように，自然の中に身を置こうという者もあり，中世における山里を志向する隠遁者の系譜はけっして途絶えることはなかった。自然を愛した漂泊の歌人であり求道者であった西行に傾倒した芭蕉は，その芸術観を端的に表したものとしてよく知られている「笈の小文」の冒頭部分において，

> 西行の和歌における，宗祇の連歌における，雪舟の絵における，利休が茶における，其貫道する物は一なり。しかも風雅におけるもの，造化にしたがひて四時を友とす。見る処，花にあらずといふ事なし。思ふ所，月にあらずといふ事なし。像花にあらざる時は夷狄にひとし。心花にあらざる時は鳥獣に類ス。夷狄を出，鳥獣を離れて，造化にしたがひ造化にかへれとなり(38)

のように述べている。自然を友とせず自然から離れた心は野蛮人のそれであるというのであるから，自然はけっして文化や人間性に対立するものとしてとらえられてはおらず，むしろ文化化された人間こそが親しむべき友であり，則るべき道理であるといった理解がみられる。荘子に傾倒した芭蕉であってみれば当然のこととともいえよう。

家永は，自然は芭蕉にとっては無上の救済者であり，仏教によっては救われることのなかった西行や芭蕉も自然の懐に抱かれたときはじめて安心を得ることができたとするが(39)、蕉風の普及にみられるようにこれら隠遁者の生き方が人気を集め影響力をもったことが，近世においても古来の原始心性が息づいていたことの証ともいえよう。

自然を人間と切り離された単なる客体とみなすことをせず，自然に人為を超えた大いなる力を感じ，人為を排して自然に身を任せ自然につき従うことで理想的な境地に達することができると信じ，自然の中に溶け込もうとする古来の態度は，日本人の心の中に連綿と生き続けた。江戸時代末期以来の西洋技術文明の急速な流入により，表面上は大いに西洋化した日本人であったが，日本的な自然への態度には根強いものがあった。

たとえば，小説は科学的でなければならないとし，心理を生理に，性格を体質に還元し，生理学的・生物学的に条件づけられた人間を描こうと試みたゾラに代表される自然主義文学運動は，明治30年代頃に日本に入ってきた。これは，道徳的な価値づけを排し，現実を客観的に観察する姿勢を強調するものであった。だが，日本における自然主義運動は，そのような方向には展開しなかった。

客観化とは自然につくられてくるものであり，自然にもって生まれてきたものから流れ出してくるようなものでなくてはならないとする田山花袋の自然主義には，対象を方法的に計量し統御するところで獲得される近代科学の対象化・客観化とはほとんど異質の理解が窺える。そこには，科学知の認識主体のように自然を自覚的に対象化してとらえようとする姿勢は希薄で，その運動は大いなるものに随順する姿勢のうちに自然の偉大なる力を縦横に発展させていく運動として展開していった(40)。宇宙も自己も同じ自然であり同じリズムが流れているので自然なものがもっとも他と共鳴するとし，なんとか自然らしさに到達すべく修業することの大切さを説く花袋にみられるのは，作為を捨てて自然の働きのなすがままに身を委ねるというおのずからなる存在のあり方であり，自然の働きを方法を尽くして客観的に観察しようという主体としての人間の堅い意志が強調される姿勢とは対極のものといえよう。

徳富蘆花の「自然と人生」や国木田独歩の「武蔵野」は自然主義文学の代表とされるが，それらが自然に対する人々の関心を高める役割を果たしたとはいえても，けっして審美的価値観を排して客観的な観察に徹するという類のものではなかった。汚れなき自然の懐に抱かれることでなぐさめを得ようとさまざまな自然の相をとらえようとする蘆花にしても，生活と自然がみごとに調和した武蔵野の自然の美しさを生き生きと描き出す独歩にしても，たしかに目の前の自然の姿を描いては

いるが，そうしながらも自然の中に人為を超えた大いなる力，永遠なるものを感じ，それを伝えようとしているかのようである。そして，自然に身を委ねることで心の癒しが得られるとでもいいたげである。西洋の近代的自我との出会いにより大いなる自然と切り離されつつある主体としての自分を意識したとき，それを確立する方向でなく自然との一体感を取り戻そうとする方向に向かわざるをえなかった日本的心性。ここには，古来の原始心性による自然崇拝と山里志向が息づいているといえる。

このように，自然主義文学運動も，日本ではその客観的で科学的な方法への志向はいつのまにか自然讃美や大いなる自然の力への帰依にすりかえられてしまった。

10章からなる日本人論の中に「草木を愛し自然を喜ぶ」という1章を置く芳賀は，西行や長明などを例にあげて，西洋でいう厭世はほんとうにこの世の中がいやになるので自殺するよりほかしようがないが，日本人の厭世は人事社会がうるさいのでありそこから遠ざかって花鳥風月に近づけば救われる，すなわち日本人にとっては人間社会がいやになっても自然という楽地は別にあるとしている(41)。また，永井荷風は，西洋人にはやるせない思いを託すべき秋の月も雁の声もないから抽象的な宗教や哲学に行くしかないが，日本人の場合はどんな感情も周囲の美しい自然に和らげられるので31文字の和歌に気持ちを託すくらいで済んでしまうとしているが，日本人にとって自然はまさに宗教にも相当する意義をもっているのであった(42)。

4．おのずから信仰と環境教育のあり方

以上にみてきたように，自然に人為を超えた大いなる力を感じ，その力に身を任せることで安心が得られるといった感覚は，日本人の中に非常に強く根づいている。そこには，自然に身を任せていれば大丈夫といった自然に対する無条件の信頼感と依存心が存在する。すべてが調和した理想的な状態へとおのずから展開していく流れを自然の動きの中に感じ，自らを自然の中に溶け込ませることで自分自身も理想的な状態へと至ろうとする。と同時に，自然に浸ることで俗世間の煩わしさを忘れることができ，傷ついた心が癒されると信じる，すなわち自然に優しく包み込んでくれる母性的なものを感じる。

したがって，あれこれと人智をめぐらすことをやめて，ありのままの姿勢を貫くことで，自然の動きに溶け込もうとするのである。すなわち，自然を前におのずからなる自分のあり方を追求する。そんな心性が古来日本人のなかに息づいていた。このような事情を前提にしてみれば，西洋から入ってきたnatureあるいはnatuurの訳語として，おのずからという状態を意味する自然の語が定着したのは，ごく自然のなりゆきであったともいえよう。

現在用いている自然の語にはこうした背景がある。ゆえに，現代において自然といえば山川草木などの自然物や天候・天災などの自然現象を意味するのは当然とみなされているが，われわれ日本人がそうした自然物や自然現象を見る際には，それらを自分自身と切り離された純粋な客体として見るのが難しい。客体視しているつもりでも，無意識のうちにその背後に人為を超えた大いなる力を感じ，自らが主体として働きかけなくても自然に任せていれば大丈夫，というより人為的な働きかけなどかえってしないでなるがままに任せていたほうが万事うまくいくといった受動的・依存的な姿勢をどこかでとっている。

古来自然と親しみ自然をこよなく愛するといわれており，たしかに文学や芸術をみても，衣服や家屋や住まい方をみても，自然と親しんできた長い歴史を持つ日本人であるが，そのわりには自然保護の意識が低いともいわれる。その背景にはこのようなおのずから信仰ともいうべき自然観が存在するのである。

効果的な環境教育のあり方を考えるにあたって，このおのずから信仰がある意味において障害となっていることを認識し，自然観を念頭に置いたアプローチ，人々が日々の行動を取る際に無自覚のうちに依拠している自然観の修正をも射程においたアプローチが必要である。客体としての自然を統御するための強力な武器である西洋的な科学技術

に囲まれて暮らしている現代においては，もはや従来の自然観は通用しないといわねばならない。環境問題に関する種々の情報を与えたところで，本論で論じてきたような日本古来の自然観を無自覚に持ち越したままでは，環境問題の解決はあり得ないのである。

自然がいかに弱く脆い面をもつか，我々がいかに強力な非自然的な力を日々行使しているか，我々の意識していないところで自然の復元力を超える自然破壊がいかに進行しているかに敢えて目を向けることが必要である。このような現実を実感したうえで，人工的なもの，作為的なことの嫌悪，人間が自然をコントロールするなど身の程知らずといった自然尊重，自然信仰の姿勢が，じつは自然に打撃を与えていることへの認識へと進まなければならない。大いなる自然を信頼しているといえば聞こえはよいが，これがすべての負担を自然に負わせる無責任な態度につながるのであり，この無邪気さこそが問題であるといえる。こうして大いなる自然に甘え依存しながら，じつはある一定の偏ったやり方で人間が自然をコントロールしている現実がある。

そのような意味において，人間が自然に対して破壊的な力を行使していることの自覚，人間が大いなる自然を場合によってはコントロール（管理）することも必要になってきていることの自覚も含めて，日頃無自覚に抱いている自然観の修正を促すような環境教育的働きかけを工夫すべき段階に来ていることを強調したい。

具体的な方法についてはまだ模索段階であり，ここに提示すべきものを持ち合わせていないが，現在盛んに行われつつある客観的世界の事実認識を促進する類の環境教育的働きかけに加えて，人々の意識や行動を知らずしらずのうちに規定している思想面・心理面に迫る環境教育的働きかけのあり方を探って行かねばならないと考える。人間の自然性と非自然性に関する問題，科学技術の歴史とその背景にある思想的根拠に関する問題，自然に対する態度に関わる倫理的問題，われわれの日々の意識や行動の形成要因に関する問題，態度変容のメカニズムに関する問題などの研究を基礎に，哲学的・心理学的な働きかけを環境教育のなかに取り入れていくことが必要であろう。

引用文献

(1)谷口文章　1994　環境思想に関する一考察 ― 環境教育と環境倫理の基礎づけのために ― 環境教育，3，2，26-39.

(2)小川環樹編　1968　世界の名著4　老子・荘子　中央公論社

(3)小川環樹　前掲書，赤塚忠　1974　全釈漢文大系第16巻　荘子・上　集英社

(4)下中邦彦編　1985　大百科事典　平凡社

(5)下中邦彦編　1981　世界大百科事典　平凡社

(6)小泉八雲　1894　極東第一日　日本の面影所載　平井呈一訳編　小泉八雲作品集　筑摩書房　1954　所収

(7)唐木順三　1993　日本人の心の歴史　下　筑摩書房（初版は筑摩書房版　1969）

(8)桑原隲蔵　1911　大師の入唐　仏教清澄集第17所載　桑原隲蔵全集第一巻　岩波書店　1968　所収

(9)桑原隲蔵　前掲書

(10)金岡秀友　1993　日本の神秘思想　講談社

(11)本居宣長　古事記伝三之巻　大野晋編　本居宣長全集第9巻　筑摩書房　1968　所収

(12)本居宣長　前掲書

(13)山下久夫　1988　本居宣長と「自然」　沖積社

(14)木村秀吉　1925　古代人の自然意識　国語と国文学，3，1，38-51.

(15)吉田光邦　1987　日本科学史　講談社（初版は朝倉書店版　1955）

(16)山路平四郎　1973　記紀歌謡評釈　東京堂出版

(17)折口信夫　1925　叙景詩の発生　太陽32巻第8号所載　折口信夫全集第1巻　中央公論社　1954　所収

(18)木村秀吉　前掲書

(19)折口信夫　前掲書

(20)源了圓　1985　日本人の自然観　新・岩波講座哲学5　岩波書店，348-374.

(21)野田浩子　1993　<叙景歌>の成立へ　古橋信孝他編　古代文学講座2自然と技術　勉誠社，202-216.
(22)内藤明　1993　自然描写の成立―自然の表現の構造と変遷―　古橋信孝他編　古代文学講座2自然と技術　勉誠社，186-201.
(23)内藤明　前掲書
(24)古橋信孝他編　1993　古代文学講座2自然と技術　勉誠社
(25)針原孝之　1984　大伴家持研究序説　桜楓社
(26)森脇一夫　1974　万葉の美意識　楓風社
(27)次田眞幸　1940　万葉歌人の自然観照　国語と国文学，17，10，37-51.
(28)加藤周一　1973　日本文学史序説　上　加藤周一著作集4　平凡社　1979　所収
(29)片桐洋一　1984　万葉集の自然と古今集の自然　片桐洋一編　王朝和歌の世界　―自然感情と美意識―　世界思想社，3-23.
(30)片山亨　1984　新古今世界と自然　片桐洋一編　王朝和歌の世界　―自然感情と美意識―　世界思想社，173-193.
(31)片山亨　前掲書
(32)吉田光邦　前掲書
(33)永藤靖　1984　中世日本文学と時間意識　未来社
(34)家永三郎　1969　日本思想史に於ける否定の論理の発達　新泉社
(35)源了圓　前掲書
(36)吉田光邦　前掲書
(37)西田正好　1972　日本文学の自然観―風土のなかの古典―　創元社
(38)松尾芭蕉　杉浦正一郎・宮本三郎校注　笈の小文　杉浦正一郎他校注　日本古典文学大系46芭蕉文集　岩波書店　1959　所収
(39)家永三郎　前掲書
(40)竹内整一　1988　自己超越の思想　ぺりかん社
(41)芳賀矢一　1938　国民性十論　生松敬三編　日本人論　冨山房　1977　所収
(42)家永三郎　前掲書